

改めて「古事記と言霊」の本文を載せます。とても大事だからです。人間の心を解き明かしてくれるのです。

それを知ることによって生きて行くための必要十分な知恵を得られるでしょう。

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

その 317

天地の初発 1

古事記の 上巻は 次の文章で始まります 文章を区切って順をおって説明して行きましょう。

天地の初発の時 ・ 高天原に成りませる神の名は 天の御中主の神 次に高御産巢日の神 次に神産巢日の神 この 3 柱の神は独り神に成りまして 身を隠したまひき。

### 天地の初発の時

古事記だけでなく 古代の世界の神話のほとんどは 最初の文章がこの「天地の初発」の事から書き出されています。 例えばキリスト教の旧約聖書の最初の文章は「元始に神天地を創造りたまへり」です。

「天地のはじめ」の天地とは何を指して言うのでしょうか。 「そんなことは言うまでもなく 我々の 完全に広がっている大きな宇宙、そしてその中にある星雲や銀河系や太陽系地球といった天体のことを言っ

いるのだ」と大方の人は思われることでしょう。果たしてすぐにそう断定して良いものなのかももう少し考えてみることにしましょう。

目をひらいて大空を見上げたとしましょう。そこには無限に広い宇宙が広がっています 夜ともなればそこには無数の星が瞬いているのが見えることでしょう。この目に見える宇宙、天地の初めといえは当然に幾100億年か知れない大昔、宇宙物理学が主張するように、混沌とした宇宙の内部が活動を始めて次から次へと天体が生成出現した時を指していることと成ります。このように考えるのが現代の常識といえることができますが、それならそう考えることにことしか解釈のしようがないのか、と言いますとそうともいいきれないことに気づくのです。

先に目を開いて大空を仰ぎました。今度は目を閉じて静かに座ってみましょう。初めのうちはつい先ほどまで仰いでいた大空の記憶の余韻が続きます。空は青かった木々の緑が爽やかだったという記憶です。そのうちに「そろそろお腹が空いて来たな」とか、「午後に会う約束の A 氏とはどんな人なのかな」などなど、さまざまな思いが心をよぎります。

このように色々な思いが表れては消え、消えては現れる心、その心の広がりを中心の宇宙と呼ぶことができます。眼を開けて仰ぎ見た外の宇宙が果てしなく無限であるように、内に振り返った心の宇宙も果てしない広がりを持っています。人間にとって大空や太陽・地球・大地など外の世界は敢然と存在しているものでありますが、色々な思い、感じが起こってくる心の世界も否定し去ることの出来ないものであることも確かなのです。

そして古事記を始め世界の各宗教書の最初に掲げている「天地のはじめ」の 天地とは外に見える太陽や地球のある宇宙のことではなく、まさにこの心の宇宙のことを指して言っているのです。 このことをはっきりと心に留めませんと、古事記や世界の神話や各宗教書の内容が途方もなく間違った方向に解釈されてしまいます。

その 318 につづく

天地の初発 2

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

その 318

現代は科学の時代です。現代人は物事を自分の外向こうに置いて考えることが得意です。それとは逆に古代は精神の時代でした。物事を見たり聞いたりしている自分自身の心の内容に重きを置く時代でありました。 そして古代には物事を表現するための哲学的概念の言葉がありませんでした。ですから心の中の出来事を表現するのに、目に見える外界の事物を借りて表現したのです。

たとえば 心の中に起こる出来事の全て、ということ表現するのに外界に見える全部、すなわち、  
天と地（あめつち）という言葉を使ったのです。古事記のはじめの言葉、「天地」とは人間の心の中  
に現れてくるもの全部という意味なのであります。

「天地」が心の中に現れてくるもの全部ということであるなら「天地の初め」とは何を指すのでしょうか。心  
に現れてくるものと言えは目や耳鼻舌身体などの感覚・好奇心やアイデア・感情・命令 等々色々あ  
ります。これらのものの初めといえば、それらが心の内に現れてようとする瞬間のこと、と思って良いでしょ  
う。 心の内に何かが現れようとする兆しの瞬間 それが物事の初めです。

そして心の中にひとつの思いの芽が兆しはじめ、それが発展して具体的な一つの思いとして心の中に現れ、言葉として表現され、発音され、その声が人の耳によって聞かれ、了解されて行く、という一連の出来事の成り立ちや活動の内容が明らかにされるとしたら、それがとりもおさず私たち人間の心の構造と活動の様式を解明することになる、 ということができましよう。そうです古事記の上巻人である神話は神様のおとぎ話でも民話でもなく、永遠に変わることのない私たち人間の心とは何か、を説明しているのです。

その 319 につづく

天地の初発 3

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

その 319

## 高天の原に

「天地の初発の時」が天体や大地がこの宇宙の中に形成された大昔ということではなく、心の中に色々な現象が現れようとする瞬間の時ということが了解されました。ですからそれに続く「高天の原に」とは

宇宙の中の何処かの場所と言うことではなく、ここでは単に「心の世界」という 程の意味にとることが適当でありましょう。

何か起ころうとしてまだ何も起こっていない真新な心の宇宙のことです。 ひとつの塵も無い透明な  
広い広い心の世界のことです。仏教ではこれを法界と呼び、禅では空と名付けました。

この高天の原という言葉は古事記の文章の中に度々出てくることですが、その使われる時と場合によって意味内容に相違があります。その都度説明することにいたしますが、今は代表的なもう三つの意味についてお話しておきましょう。

「天地のはじめ」の次の高天の原は、何の出来事も起こっていない清浄無垢な心の宇宙のことです。

その何もない心の内に活動が起こり、思いが具体化して、言葉となり、その結果として心の全構造が人間によって完全に認識・自覚されます。この認識された理路整然たる心の世界、これを高天の原と呼びます。

さらにもうひとつの高天の原とは、心の構造をはっきりと自らの心の中に理解した人が集まり、その原理に基づいて文明を創造し、人々を教化する政治の場のことを指して言う場合です。このような政庁を昔は百敷の大宮と呼びました。



高天原という言葉についても一つの話をつけ加えておきましょう。高天の原という名の由来です。この本の話が進行して人間の心とはどんな構造をしているのか、が次第に明らかにされ 結論として理想的創造精神の構造が五十音の言霊の図として把握されることとなります。この図表を天津太祝詞音図と言いますが、その音図の上段の十音のが、向かって右からアタカマハラナヤサワと並びます。その十音の中の傍線を引いた部分の五字タカマハラ（高天原）を取って名付けたものです。でありますから高天の原は正しくは、タカマハラと呼ぶのが適当と言えます。

その 320 につづく

天地の初発 4

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

その 320

## 成りませる神の名は

何事も起こっていなかった高天原という心の宇宙に、ある時、ある処で何かが起ころうとする気配が始ま

ります。心の中にひとつの思いや考えが起ころうとして来ます。心の活動の始まりです。

普段私たちは何かを思い、感じた時、それが心の活動の始まりと思っています。「喉が渴いたな」と思うのが始めて、次に「お茶が欲しい」と続くと思っています。けれど自分の心の内をよくよく考えてみますと、「喉が・・・」と頭で具体的な言葉として思う以前に、頭脳の中で複雑な経緯（いきさつ）があることがわかります。

物事を（それがどんなに簡単な出来事であっても）それを思い、感じる以前に、頭の中では目まぐるし動きがあって、その後に「ああ喉が渴いた」という具体的感じがでてくるのです。

具体的に「喉が渴いたな」と感じたときはすでに心の出来事です。 その出来事が起こる以前の心の働  
き、まだ形として現れていない働きを、心の先天活動と呼びます。 経験する以前、ということで 先験  
活動とも言われます。

そしてそれに対して、具体的に思い感じたことを後天活動と呼んでいます。 そして今お話をしています  
「天地のはじめの時」というのは、出来事としてわかる以前の心の先天活動について言っているのです。

さて頭の中に何かの思いの兆しが動き始めました。もちろん具体的な思いになる以前の動きですから、人はそれを何だと表現するまでに至っていません。けれど何かが成立し始めようとしています。その成立し始めようとするを、古事記は「成りませる」と表現しました。また具体的に仕事として起こった時は言葉として成立しますから、言葉である音が「鳴る」という字を当てて考えることもできます。くどくどとお話するようですが、人間の思いが初めて動き始める瞬間の様相は以上のように考えられるのです。

何もない広い心の宇宙に何かが動き始めました。それはどんな事なのでしょう。話は次に移ります。

その 321 につづく

天地の初発 5

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

その 321

天の御中主の神

言霊 **ウ** 心の中に具体的な事柄として 言葉で表現される以前の、意識されない頭脳内の、先天の構造の中のお話であることを心に留めておきください。 何もない白い心の宇宙の中に何かが動き出します。何かは分からないけれど広い宇宙の一点に動き出したもの、そしてやがては「私」という意識に発展して行く最も原始的な意識の姿です。

宇宙の中に初めて意識が動き出す一点、それはよくよく考えてみますと、その動き出す瞬間が今であり・

此所であるということです。 心の息吹きが芽を吹き萌え出ようとする瞬間こそ 現実の今であり、此所であ

る、ということができるとでしょう。これ以外に今という時と此所というところはありません。

私たちの心の活動はいつでもこの今、此所から出発しています。人間万事すべての活動が始まる出発点です。古事記の編纂者太安万侶はこの人間の原始的な意識に天の御中主の神という神名を当てて表現したのです。 その実体を言霊の学問で言霊ウといいます。

太安万侶は今・此所に始まる意識の元の姿に天の御中主の神と言う名前を当てたのでしょうか。天の御中主の神の「天の」は心の宇宙の、と言う意味です。

「御中主」とはその宇宙の中心にあって、すべての意識活動の元（主人公）としての、の意味。神はそういう実体の事。

広い心の宇宙に、ある時ある処で、やがて発展して私という自覚となる原始的な意識が芽生えます。この意識がどんなに小さい、ささやかなものであっても、無限大の宇宙がその今・此所の一点から活動を開始するのですから、その瞬間の一点こそ宇宙の中心とすることができます。

そしてその一点がやがて「我あり」の自覚に発展して行くのですから、宇宙の主人公というわけです。私

たち日本人の祖先は、この一点の原始的な自覚体に言霊ウ、と名付けたのでした。そして太安万侶は、古事記神代の巻きの編纂に当って言霊ウを指し示す「指月の指」として天御中主の神という神名を使ったのです。

注一、心の中の宇宙に活動が始まる一点、今・此所を古代の人は「中今」（なかいま）と名付けた。

「続日本書紀」誠に当を得た言葉と言える。

注二、宇宙が活動を起こし、中心の一点が動き出し（言霊ウ）、次々と活動が進展して、ひとつの

出来事（現象）となって現れる。その活動を「宇宙剖半」（ぼうはん）と呼びます。剖は分か

れる。判は分かる。剖れてゆく活動が人間に理解されて言葉として分かる、ということである。分

ける、から分かる。日本語の言葉はこのように巧みに出来ています。

注三、心の最初の活動について、古事記は「成りませる神・・・」と表現した。これは心の構造を明らか

にすることを目的とした書き方である。同じことを表現するのに聖書創世記は「神、天地を創造り

たまへり」と記している。神を本位とした書き方である。聖書が古事記と違い、人間の信仰の

書として書かれたからである。

その 322 につづく

天地の初発 6

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

その 322

古事記と言霊との関係の話はまだ始まったばかりです。けれどこの両者の関係について 賢明な読者はもうお分かりになられているかと思います。古事記が編纂される以前から 人間の心の全容を解明した言霊の原理なるものがすでに日本人の所産として世の中に用いられており、その原理がある理由から呪示・比喩の形式で書き現わされることになったのが大野安麻呂による古事記神代の巻である、ということです。

言霊の原理がまずあり、その後で、なぞなぞとしての古事記が作られた、と言うわけです。今後古事記と言霊との関係が明らかになるにつれて、読者はこの事実を確認することとなります。



心の宇宙の中に活動の第一歩が始まりました。天の中の御中主の神 言靈ウの誕生です。これを  
図で表現しますと下の図のようになります。 宇宙の中心に「我あり」の自覚の最も原始的な 意識の  
芽が萌え出しました。言靈ウです。宇宙の始まりです。

この言靈ウの内容を表す漢字を拾ってみますと、有・生・動・蠢く等が考えられます。言靈ウについ  
てさらに考えてみましょう。 私たちは今までお話しましたように 目に見える外の世界から一転して、そ  
れを見ている自分の内なる心の世界を考えてきました。そして色々な心の現象が無限に広い心の宇宙  
から現れてようとする瞬間の一点を考える事と成りました。この一点の何かわからないが何かが始まる存  
在として言靈ウに思いが到達しました。まさしく 心の活動の最初の一点です 。 この一点を了解した

心でさらに思いを先に進めてみましょう。

思いを内に向けて自らの心を顧みて、広い宇宙の存在とそこから心の活動が始まる最初の一点である言霊を確認しました。この事実は次のように考えることもできます。外界の宇宙ではなく、外界を見ている内なる心の存在に気づきました。その心の中には種々雑多な心の現象が現れては消えていきます。そして人はそれらの現象がそこから現れ、そこに消えていく、内なる広い広い、無限の宇宙の存在に行きあたりります。

そして人間の思考がもうそれより先には進むことができないことに気づきます。宇宙は無限です。時間的にも空間的にも無限です。人間の心はこれより先に遡ることはできません。いわば人間の思考には無

限という限界が あるということが出来ます 。

その 323 につづく

天地の初発 7

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

その 323

私たち人間の心はこれ以上遡ることができないのですから、引き返すことしか方法はありません。どこへ引き返したらよいのでしょうか。それは無限の宇宙から、有限である心の活動が始まる一点へ引き返すことです。 活動が始まる一点、それは現実的に言えば 今・此所ということです。

こうして考えてきますと、 人間の心が活動する最初の点である無限から有限が始まるという関係を了解することができましょう。 無限の宇宙を天といい、最初の有限を中主と言います。今・此所である中今

の自覚者（主）ということでもあります。最初に生まれた一つの存在である言霊ウに対して太安万侶

が天の御中主の神という神の名を当てて表したのも誠にもっともなことではありませんか。

人間の心の活動が始まる瞬間に、心の中でどんなことが起こるのかをお話してきました。話がややもすると、難しく煩雑になって恐縮なのですが、これも心の出来事として人間が意識する以前の頭脳内の作用についての話ですので、やむを得ないことなのだとご了承ください。難解ついでにこの初めの瞬間である言霊ウについてももう少しお話ししたいと思います。

最初の心の活動の一点になぜ言霊ウと名付けたのでしょうか。それは活動の最初の一点がどんな精神内容であるか、に合わせて五十音の中から最もふさわしい音として「ウ」を選んで名前をつけたのです。音声学という学問がありますがそれによりますと、母音のウが五十音の中で、人間が発する言葉の最初

の音である、と言います。

また人間の精神構造が全部明らかにされ、その構成要素にアイウエオ五十音の単音をそれぞれ結びつけたとき、最初の原始的な意識にウの一音を当てはめると、全部が合理的に整頓されることから言霊ウと名付けるのが妥当であるという、ことが証明されてきます。

意識の萌芽とも言える言霊ウは、現実の人間の生活とどんな関係があるのでしょうか。それは人間だけでなく、すべての生き物（動物・植物）の持っている 最初の最も単純・直接で 衝撃的・本能的な「感覚」という精神活動となって発現してきます。 人間にあっては 眼耳鼻舌身の五官感覚です。

注一、心の中に適合した言葉を選んで名前を付けることを古語で「うら合え ま かな はす」と言う。

「うら」は裏で心の意味。悲しいことをうら悲しいという。「合え」は 合致させる、の意味。「ま」は 真のこと。「かな」は 神名（かな）で言葉のこと。

注二、何の現象もない宇宙が活動を開始して何だかしれないが何かが動き出す。古人はこの原始の意識の一点に言霊ウと名付けた。梅の木が冬まだ去りやらぬ 白一色の野に、春に先駆けて生命の息吹とも言える花を咲かせる。言霊ウの芽の意で、その花を「うめ」と名付けた。梅の語源である。

「梅一輪一輪ほどのあたたかさ」は有名な句である。

その 324 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

その 324

**次に高御産巢日の神。 次に神産巢日の神**

言霊 ア ・ ワ 広い心の宇宙に何かが動き出しました。言霊ウです。次に先天の頭脳構造に何が起きるのでしょうか。

秋か冬によく晴れた日高いビルの屋上に立って仰向けに横になったことがありますか。経験の無い方は想像してみてください。目に見えるものはただ一面の透き通った青い空、一点の雲もありません。その青い空を緊張せず、ただ漫然と見ていますと、いつの間にか空が下がってきて自分を包み込んでしまうような、または自分がだんだん空に向かって上って行って空の中に吸い込まれてしまうような気持ちになります。誠に奇妙な気分です。それでもめげずにじっと空を見ていますと、一瞬自己意識が消えて、自分が空か、空が自分か、わからなくなってしまう。

人間は相対するものを見たり聞いたりする時、自我意識します。仰向けに横になって一面の青空を眺めて、視点としての対象となるものを失ってしまいますと、自我意識も薄れて、終にはなくなってしまいます。

以上のことを逆に考えてみましょう。澄んだ青一色の空をじっと見つめて、見る対象を失って、自分が空か、空が自分か分からなくなりました。それは自分が空を見ているのでもないけれど、見ていないのでありません。そんな状態です。



心の世界で何か見ているが、何かわからない状態、正しくは前にお話ししました広い心の宇宙から何か意識が生まれ、動き出した状態と同じではありませんか。 言霊学はこれを言霊ウと呼んだことはすでにお話ししました。

それなら言霊ウの次に心の世界に何が起こるかももうわかりでしょう。 心の宇宙の中に 一点言霊ウが生まれ、次に宇宙は主体と客体、見るものと見られるもの、私と貴方に分かれることになります。見る主体を言霊ア、見られる客体を言霊ワといいます。 古事記の編纂者はそれら言霊の意義・内容を指し示す指月の指として 高御産巢日の神・神産巢日の神という神名を当てたのでした。

その 325 につづく

天地の初発 9

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

その 325

心の宇宙から言霊ウが生まれ、次に言霊アとワに分かれた、と言いましても、これらはまだ意識の自覚に至る以前の先天構造の内部のことです。見ている側が何の誰べえとか、見られている客体が何々のものとか、という具体的なことではありません。あくまで先天の構造についてお話ししているのだ、ということをご承知ください。

この何も無い宇宙から言霊ウ、ア・ワと分かれてくる状況を図で示しますと下の図のようになります。

言霊アとワについて太安万侶が「高御産巢日の神・神産巢日の神」という名を当てた意図は何だったのでしょうか。両方の神名をかなで書いてみましょう。タカミムスビノカミ・カミムスビノカミとなります。両方を比べてみますと、漢字で書いたときには気がつかないのですが、主体を現わす高御産巢日の神の方の頭に「タ」の一字が多いという他は全く同じであることに気づくでしょう。まずその「タ」の一字を除いたカミムスビノカミについて考えてみましょう。

カミムスビのカミは 噛むの意です。噛み合わさる、ことです。ムスは生まれる・はえる・生じる、という意。

ビは霊で言霊特に子音のことです。むして出来た子を息子（むすこ）といいます。 カミムスビの 全部で「噛み合わさって現象である 子音を生じる」となります。

噛み合わさることを現代語で 感応同交といいます 。 主体と客体がお互い感応同交して現象が生まれると言うことです。 男と女が感応同交すれば子が出来ます。 そのお互いに噛み合わさるものそれは主体と客体であり、我と汝であり、また男と女・出発点と目的点・積極と消極などなど色々なことに当てはまります。

次に主体の方にただ一字タの字のかんむりが付いているのはなぜか、を考えてみましょう。音声学ではタ行のタチツテトのことは陽性で積極的な音だといいます。剣道で刀を大上段から真っ向に振り下ろすときの掛け声がタ行の音です。純粹の主体と客体が感応して現象を生み出そうとする時イニシアチブをとるのは常に主体からであって、客体はただ受け身となるだけです。ですから主体であるタカミスビノカミの方にタの字が 頭についていると説明できます。

その 326 につづく

天地の初発 10

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

その 326

それだけではありません。言霊学の講義はまだ始まったばかりですが、話が先に進みますと 人間の心の要素が全部で五十個の言霊で構成されていて、それら五十個の言霊で心の構造を表すと縦五個横十個の 言霊が並ぶ五十音が出来上がります。現在私たちが使っているアイウエオ五十音図もその一つです。

それは自覚された人間性の内容を示しています。またその形はちょうど 稲を作る田んぼの形でもあります。後の話に出てきます言霊学の総結論に与えられた神様の名前である天照大神は田を耕していると古事記に書かれています。たというのは言霊の一音は田の字に通じ、それは自覚された人間性を表します。 主体の側である高御産巢日の神の冠にタの一字がつく理由となります。

主体と客体が感応道同交するとき、主体だけが人間性の自覚に裏打ちされた働きかけが許されており、客体側ただその働きに 働き掛けに答えるだけに過ぎません。

話が少し難しくなってきたかも知れません。

もう少し説明しましょう。人が何か一つのものについて調べるとしましょう。その人の研究が色彩に関するものである場合、そのものの色が問題となり、その他の性質である硬いか柔らかいか、金属製か木製か、などの問題は一切無視されるでしょう。客体は現象としては主体の問いかけにのみ答える、ということをお分かりいただけることと思います。

何もない心の宇宙からある一点が動き出します。言霊ウです。このときはまだ主体と客体に分かれていません。主客未剖と哲学と呼びます。そこに人間の何かの思考が加わる時、一瞬にして「何かあるもの」は主体と客体に分かれます。ウからア・ワに分かれます。主客未剖の二者が思考が加わると主と客の二者に分かれる。

その 327 つづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

その 327

この一見当たり前のように思える働きですが、人間の心の働きにとって重要な事柄なのです。一の一者が二者に分かれること、これが人間知性の第 1 の法則であり、また人間の宿命である、ということが出来ます。

また次のようにも言えます。宇宙からまず一者が生まれ、それが二者に分かれ、それぞれにウ、ア・ワと名前が付けられました。生まれてくると同時にそれに名が付くこと、これが人間の創造の始まりです。名がつかなければ何も始まらないのと同じです。これも人間の心の営みの大原則ということができましよう。

では言霊アである世界は人間心理とどんな関わり合いを持つのでしょうか。言霊アから出てくる人間心理はそれは感情です。また主体である言霊アの内容に当たる漢字を拾ってみますと「天」・「吾」・「明」などが考えられるでしょう。」そして客体であるワには「我」・「和」・「輪」が考えられます。

注一、昔は私のことを「吾」（あれ）・貴方のことを「我」（われ）と呼んだ。

現代でも「お前」のことを「我」と呼ぶ地方がある。

注二、宇宙からまず一者が生まれ、それが二者に分かれる。宇宙がこの三つに分かれたということ、

それが人間の知性で理解したということは同時に分けることができない事柄である。そしてその

事が人間のすべての始まりである。この三者、言霊ウアワすなわち天御中主の神、高御産巢

日の神、神産巢日の神の三神を神道で造化三神と呼ぶ。中国の老師はこの事を「一、二

を生じ、二、三を生じ、三、万物を生ず」と説明している。

注三、このことを「老子」には「無名は天地のはじめ、有名は万物の母」と説いている。

その 328 につづく



天地の初発 12

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

その 328

**この三柱の神は、みな独り神に成りまして、身を隠したまひき**

独り神とは独立している神と言うこと。独立でありますからそれ自体だけで存在していて、他に依存していないこと、というわけです。どういう事が例をあげて説明しましょう。言霊アと言えばそこから人間の感情がほとぼり出てくる元の宇宙です。そして人間の感情というものはそれだけで人間心理の一世界を形成していて、人間心理の他の出来事であります欲望とか、経験知などに依存することなしに働きます。そのような一つの独立した心の世界（次元とも言います）を独り神といいます。

身を隠したまひき、とは 目で見、耳で聞かれるような現れた出来事（現象）ではなく、心の先天構造  
の中でだけの実在でありあるから、「身を隠している」ということでもあります。例えば「私」というものは色々  
な出来事を創り出し、その出来事は見聞きすることができますが、私自身そのものは現象として現れること

はありません。それは抽象的な概念として、または 宗教的な近くの内容としては存在しているけれど、具  
体的に「コレですよ」と人に示すことはできません。先天構造の内部にだけ存在していて 後天的な具体  
性を持ったものではありません。これが身を隠したまひきという意味です。

次に国稚（わか）く、浮かべる脂の如くして水母<sup>くらげ</sup>なす漂える時に、葦芽（あしかび）のごと萌え騰（あ）がるものに因りて成りませる神の名は、

心の先天構造の中に初めて生まれてくるウアワの三つの言霊の宇宙が確認できました。次に宇宙はどう分かれてくるのでしょうか。話を先に進めることにしましょう。

「国稚く」（くにわかく）の 国とは、組んで似せる、または区切って似せる、の意。分かったものに名を  
付ける、と言うことは、 広い宇宙の一部を区切って他と区別して言葉としてそのものの内容を表現するこ  
とです。

現在使われている国という言葉も、世界の中から日本という国を区別してつけた名前、と言うことができます。何も無い宇宙からウアワの三つの宇宙が分かれてきて、それに名が付いたけれども、まだそれだけでは心の宇宙の区分けは始まったばかりで、はっきりしていない。そのことを「稚い」（わかい）と表現しました。

「浮かべる脂の如くして」とはその状態は水の上に漂っている油のように不安定であって、の意。「水母なす漂える時に」の水母は暗気の意、混沌として暗黒に包まれていて、まだはっきりと分別が出来ていない、ということです。心の宇宙に意識の芽が生まれ、それが主体と客体に分かれた、というだけでは 整理確認の作業は混沌としている、ということあります。

「葦芽」（あしかび）のごと」とは葦の芽の如く、の意。「萌え騰がるものに因りて」とは、葦の芽が次から次へと連鎖反応を起こすように吹き出てくる様子にたとえている。では何が出てくるか、といえば……」

その 329 につづく

天地の初発 13

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

その 329

うましあしかびひこじかみ 宇摩志阿斯訶備比古遲の神。 次にあめとこたちかみ 次に天の常立の神。

言霊ヲ・オ

うましは靈妙な意。あしかびひこじの阿斯訶備は葦の芽、比古遲とは男の事。 男は音の子で言葉を意味します。全部で靈妙な葦の芽のように次から次へと萌え出てくる言葉の実体、ということになります。心の中で次々に吹き出るように現れてくるもの、といえば、それは直ぐに人間の記憶である事がお分かりのことでしょう。宇摩志阿斯訶備比古遲の神とは 人間の記憶、経験した出来事の記憶のことです。

その記憶はただ一つポツンとあるものではなく、他の記憶と連結していて、次々と果てしなく関係が広がります。その経験の記憶が存在する宇宙のことを言霊ヲと言います。そのヲを漢字を当てはめると 尾・緒などが考えられるであります。

記憶の連鎖のことを生命の玉の緒となど呼びます。この緒が途切れてしまうのが人間のボケです。また記憶というのは、経験そのものは過去のものとなっても、何時までも尾を引いて残ります。それは動物の尾のようなもので、窓の前を動物が過ぎ去っても、尾っぽが、一番後まで残るようなものです。

天の常立の神とは大自然（天）が恒常に（常）に成立する（立）主体、といった意味であります。

阿斯訶備比古遲の神が記憶そのものの世界（言霊ヲ）とすれば天の常立の神とは記憶し、その記憶

がそれぞれの関連を考える主体の世界（言霊オ）ということができましよう。記憶とその関連を考える世

界といえは、そこからやがて学問が成立してくる世界であります。それはまた「自然界とは何か」の思考を

成立させる心の世界のことでもありましよう。

\_\_以上の記憶とか学問的な思考を成立させる宇宙も、それだけで十分独立していて他に頼る事なく存

在する世界です。またそれは先天構造の中の存在であって、それ自体は現象となって姿を現すことは決し

てありません。ですからこの言霊オ・ヲも「独り神に成りまして、身を隠したまひきなのであります。

その 330 につづく

天地の初発 14

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

その 330

次に 成りませる神の名は 国常立の神 次に豊雲野の神 この二柱の神も  
独り神に成りまして 身を 隠したまひき。

### 国の常立の神 豊雲野の神

言霊工、工 国の常立の神とは国家（国）が恒常に（常）に成立する （立）ための実体（神）

という意味であります。この実体が言霊工です。

この宇宙の広がりから現れてくる人間の働きは実践知です。言霊工に漢字を当てはめると 選の字が最

も適当でしょう。 言霊工に「選ぶ」を当てのが、なぜ良いか、もう少し詳しく説明することにしましょう。

広く何もない宇宙の中に 意識の芽ともいわれる言霊ウ生まれます。まだ主客未剖で、何かあるがそ  
れが何であるかわからない状態です。言霊ウは五官感覚作用が現れてくる世界です。次にその何だか

わからないものに人間の「何かな」という思考が加わった瞬間、言霊ウの宇宙は別れて主体（吾）と客  
体（汝）である 言霊アとワの宇宙となります。

言霊アの宇宙から現れる人間性能は感情です。 「何かな」の思考の次に、人はそれを今までに経  
験した過去の出来事の中に求めようとします。記憶と結びつけようとします。言霊オとヲの経験値の世界  
が生まれます。

そしてその何かが分かたら、人間は次にそれをどう扱うかの選択に迫られます。言霊工とエが現れます。  
言霊工（工）とは 人間の選択する知恵すなわち実践智が現れてくる宇宙のことなのです。言霊工に  
「選らぶ」の字が適当だと、お話ししました理由です。



¥

豊雲野の神の「豊」は 十四の数を示す謎です。解説は後章にゆずりますが、十四は先天構造を構成している言霊の基本数なのです。豊葦原の瑞穂の国の豊も同じ意味であります。

「雲」は組むという言葉を示す謎です。「野」は分野という程の意。豊雲野の神で先天構造の言霊をどのように組んでいくか、を考える分野の実体といった意味にとれます。それは実践智によって現わされた道理とか道徳とかいう意味となりましょう。言霊工に当たる漢字を拾いますと慧・絵等が考えられます。

その 331 につづく

天地の初発 15

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

その 331

ここまでの話で、広い何もない宇宙からウ、アワ、オヲ、エエの宇宙が生まれてくることが確認されました。

言霊ウから五官感覚作用が言霊ア（ワ）からは感情が、言霊オ（ヲ）から経験知が、言霊エ（エ）か

ら実践値智が現れてくるそれぞれの独立した宇宙であり、 その一つ一つは先天構造内部のもので、それ自体は現象として姿を現わすことがない実体であることが分かりました。

そして母音で現わします言霊アオエが主体の側であり、 半母音である言霊ワヲエが客体の側であることも分かりました。これを図で示しますと下の図のようになりましょう。

先に宇宙に意識の芽とも言える一点言霊ウが生まれ、そこに何かの思考が加わると主体と客体言霊アとワに別れること、それが心の働きの第一の法則であり、また人間の宿命とも言えるものだ、ということをお話ししました。

さらに今、言霊オの経験知と言霊エの実践智という二つの知恵があらわれてきました。言霊ウ、ア・ワの宿命的な法則と経験知と実践智の区別との間には密接な関係があり、 今後幾度となく解説するこ

ととなりましょうが、今は簡単に説明することといたします。

現代人は 知恵というと主として学問的知識のことを思い浮かべ、物事に処する「機転」という実践智の方を見落としがちです。また知恵と言えば両者を混同して思いがちです。けれど 両者はまったく次元も成り立ちも違う別のものであるのです。ではどのように違うのでしょうか。

ある事物を見て 見る主体と見られる客体が分かれたところから思考が始まる時、言い換えますと、ある

出来事を見てそれを頭の中に思い浮かべて、「これは何故かな」と思考が始まる時、学問的な知恵、言

霊才の世界の働きが現れてきます。

これとは別に「何、何故の思考」を傍らにおいて 思考の初めである宇宙の初発に帰り、「さて私はどう

しようかな」と思う時、実践知である言霊工からの知恵が働き出すということになります。 詳しい説明は

後に譲ることにしましょう。

注一、 豊雲野の神を日本書紀では「豊斟傍尊（とよくみぬのみこと）、豊組野尊、豊香節野尊

（とよかふしぬ）、浮経野豊買尊（うきふぬとよかい）、葉子国野尊（はこくにぬ）などと

書いている。浮経野（うきふぬ）とは浮船の謎。葉子国とは箱国の意。私からあなた


に心を渡す言葉を船に喩える。また言霊五十音図は方形の為に箱と呼ぶことがある。日

本書紀の種々の神名の内容は非常に興味深いものがある。

注二、 言霊工から現れる経験知の構造を図示すると△三角形で表すことができる 正反合の弁

証法的思考と哲学と呼ぶ。三角形は△形而上学、逆三角形▽は形而下学、二つ合

わせてカゴメのマークで示す。西洋的思考の代表系である。

注二、 言霊工から現れる知恵の基本形は□四角形である。田  で表される東洋

的思考の代表系である。

その 332 につづく

